

『以呂波物語』の特質について

——大師物浄瑠璃の流れに即して——

弘法大師の生涯をテーマにした作品は諸ジャンルに跨がって数多く指摘することができる。それはいわば弘法大師物ともいうべきジャンルを形成している。それだけ、庶民の弘法大師信仰の多様さ、広汎さが物語られているのだといえる。『以呂波物語』も、そうした一連の弘法大師物の一つであり、「貞享元年甲子歳三月吉日加賀掾」の刊記を持つ加賀掾正本である。弘法大師物の古浄瑠璃としては他にも『弘法大師出世之巻』『弘法大師誕生記』『日本九ほんのじやうど』が知られている。そして、これらの三作品が空海の母の物語を中心にした説経「かるかや」の「高野の巻」系統の作品群として一つの流れを形成している事についてはすでに拙稿「井上市郎太夫『弘法大師出世之巻』について」^①で指摘しておいた。本稿ではそのうした弘法大師物の古浄瑠璃の流れの中に『以呂波物語』を位置付け、その特質を明らかにしつつ、これら四作品の大師物の古浄瑠璃

『以呂波物語』の特質について

山 田 和 人

の流れを当時の浄瑠璃劇界の状況の下でとらえなおしてみたい。

一

まず、論述の都合上、前稿と重なることになるかもしれないが、『以呂波物語』以外の弘法大師物の古浄瑠璃『弘法大師出世之巻』『弘法大師誕生記』『日本九ほんのじやうど』について整理しておきたい。

ア、『弘法大師出世之巻』井上市郎太夫正本 延宝七年四月下旬
半紙本 五段 一八行一六丁半 鶴屋喜右衛門板 洛東遺芳館
所蔵 拙稿・『同志社国文学』三十号翻刻、『近世文芸』四十二号「井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』について」

イ、『弘法大師誕生記』相模掾正本 貞享元年三月（推定） 半紙
本 五段 一七行一七丁半 鶴屋喜右衛門板 東大霞亭文庫所

蔵 横山重・信多純一氏共編・古典文庫「古浄瑠璃集」角太夫

正氏所蔵 拙稿・「芸能史研究」九一号解題・翻刻

正本二 解題・翻刻

前稿において『弘法大師出世之巻』を中心に三作品相互の影響関

わ、【日本九ほんのじやうど】出羽掾正本（推定）貞享末頃（推定）半紙本 五段カ 一七行六丁半（落丁）板元未詳 横山 係の整理を試みているので、ここでは参考のために三作品の構成全体について比較対照表を掲げておくことにする。

弘法大師出世之巻

弘法大師誕生記

日本九ほんのじやうど

① 讃岐の佐伯侍従直氏にあこや御前（十六歳）、みさき御前（二歳）の娘があった。

山部親王の春官に立つ折に后を迎えようと評議するうち、藤原のたまろ公の提案であこや御前を迎えるべく、師の宰相まさ村を讃岐へ勅使として派遣する。

母と死別し無常を嘆くあこや御前を慰めるために女房達は管弦の宴を催す。あこや御前、扇売りの所作。

まさ村、直氏を訪れ、あこや御前を山部親王の后として入内させたい旨を伝えて戻る。

① 讃岐の正五位中将あとのともたりに、源太ともみち（十八歳）、あこ御前（十五歳）の子があった。

山部親王の春官に立つ折に后を迎えようと評議するうち、中納言家継からあこや御前の名がある。藤原も、かはは、家継とその娘なかはしの局を勅使として讃岐に派遣する。

家継、直氏を訪れ、なかはしがあこや御前の器量容貌を吟味し、姫の乳母にその十分な資質に満足した旨を告げる。

ともたりらは家継一行を鯨漁り見物という趣向で歓待する。

① 讃岐の領主あとの太夫ひろなりにあこや御前と甥あとの大かうたつむねがいた。

あこや御前はたつむねの捕えた鷹の子をもらいうけようとする。たつむねはかねてからあこや御前に恋慕しており、あこやはそこで巧みにたつむねを騙して鷹の子を譲り受けて放してやる。たつむねはそれに気づいて立腹する。

廿三夜の月待の折、あこや御前の前に八十ばかりの老僧が忽然と出現し、自ら三藏と名告り、衆生済度のため仏に胎内をかしてくるよう告げる。

あこや御前が立後の件によりためらうを懐胎十月の守護仏示現し、その奇瑞をあらわす。

② 宝龜五年三月二十一日にあこや御前、家で無事男子出産。

あこや御前は若君が只人ならざることを直氏に説くが信用されず、手討ちにされるところを母に救われるが勘当を受け、姫は男子を抱いて家を出る。

② 月待の廿三夜、あこや御前琴を弾いている時、雲に隠れようとする月を扇で招くと、月は下つて消え、十六ほどの男子と現われ笛を奏す。二人の間に歌の贈答。男子はあこや御前に再三求愛するが姫はあくまで拒み通し、男子は去る。

雲に隠れた月が現われ、その中から独結の形が顕れ、あこや御前の胎内に飛入る。

あこや病悩、典棄のほうげんはあこや御前懐妊の由を告げて帰る。

宝龜五年三月二十一日にあこや御前、かげゆ館で無事、男子出産。

あこや御前は忠臣かげゆにこの子が仏の化現であることを告げる。その折泣き声が真言となり、頭が輝き、その奇特に人々は礼拝する。

かげゆは母子を泊りの磯の源太夫のもとへ落とし、その時若君に虚空蔵菩薩のお守りをつける。

大鷲が、山中を行くあこや御前から若君をつかみとり、空に舞い上る。

③ 源太とも道はともたりにあこや御前の出産を告げるが、ともたりは、かげゆ、源太に命じてあこやを討ちとろうとする。

かげゆは思案にくれ、娘もしほをあこやの身替り

月待のある夜、あこや御前琴を弾じ、雲に隠れようとする月を招くと、神童が現われる。神童は真言の秘密を日本に広めるためにあこや御前とかりに契りを結ぶことを告げて去る。

あこや御前の夢に、懐胎十月の守護仏が現われ、十月の由来を示す。

夢からさめた姫はこのことを乳母、女房らに語る。

挿絵「たつむねが若君を谷へ落とし、若君が松の枝にかかって危くなる」
(一ウ右下)

挿絵「前に助けた鷹が若君を救う」
(二オ左下)

あこや御前は泊りの磯で和泉権尾勤操和尚と出会う。和尚は若君の泣き声を念仏と聞きその子を権者と悟り、自ら養育を申し出る。あこやは承知して若君を手離すが、恩愛断ち難く、後を追いかける。

若君は成長し、十四歳で金玉丸という。金玉丸は修行を重ねる。ある時、墓所の塚で結跏趺座しているところを襲った化生の者を退散させる。そして化生の者どもに頼まれ金玉に襲いかかる山中の庄司のうばを仏力で追い払う。後に、庄司正つらをまどわす悪鬼の正体を見出し、親の仇の悪鬼を正つらに討たせる。

③ 金玉丸は十七歳で空海を名告り、入唐渡天の志を持つ。

直氏は流浪し、盲目となり、娘みさき御前に養われていた。そのみさきの留守中に偶然訪れた空海に見とられて直氏は死去する。

墓所で空海はみさき前の身上話から、盲目の老人

に討とうとし、もしほもそれと聞いて自ら身替りに立つ。

母さつきの前は娘の心中を思いやり、自害をはかろうとするが制せられ、あこや御前のもとへ急ぐ。かげゆはもしほの首を持って出るが、首実検役の源太は、かげゆの諫言も聞かず姫の首を所望するので、ついにかげゆは源太を斬って自害する。

④ 石淵僧正勤操は大鷲が四、五歳の稚児をつかみ、沖の小島へ向うののを見てごんかい、れうごんを遣わす。連れ帰った稚児の胸には虚空蔵菩薩がかけられていた。そこで勤操は、虚空蔵の告げにより海辺で巡り合ったことから空海と名付け、権尾へ伴った。

かげゆ女房さつきの前はあこや御前を探し求め、偶然再会をはたす。あこやから若君が大鷲にさらわれたことを聞かされ、噂の勤操和尚の弟子が若君ではないかとあこやを元気づけ連れだつて巡礼に出向く。

〈空海道行〉
〈姫道行〉

⑤ 空海は泊りの磯に着く。辻堂に偶然泊り合わせた空海と巡礼は縁の下に宿っていた老人に出会う。衰弱していた老人は空海の念仏で息を引きとる。あこやは老人の所持していた巻物からなくなった

挿絵「前に助けた鷹が若君を救い「けいくはおしやう」と弟子達の乗る船に若君を落としていく」

(二才左下)

<p>が父直氏であること、みさきが母あこやの妹であることを知り、互いに愁嘆する。空海は佐伯家の系図をみさきに渡し、都の中納言定をまを訪ねるようによすめ、修行の旅を続ける。</p> <p>空海は筑紫宇佐八幡宮に参詣する。</p> <p>空海は御神体を拝せうと祈念する。やがて、女人悪鬼、六字の名号と姿を變じ、阿弥陀如来と示現する。後に空海は渡唐し、惠果和尚に対面し、真言の奥義をきわめることになる。</p>	<p>のが父ともたりであることを知る。あこやは父の死骸に抱きつき、行方不明の我子のことを語る。その話から空海は自分が虚空蔵の守りを所持していたことと照らしあわせて親子の対面となる。</p> <p>空海は修行のために母と別れて屏風浦までくる。</p> <p>空海は荒行を続ける。</p> <p>靈龜の奇瑞が現われ、弘誓の舟中の異相の女性からいろは歌を伝授される。その女は文珠菩薩とあらわれる。</p>	<p>挿絵「もんしゆちへくらへの所」が描かれており、「くうかいなみにのり」流れる水に龍という字を書く。その「れうといふ字大じやとなる」</p> <p>(三ウ下)</p>	<p>挿絵「けいくはおしやう」ちけいしやみんみる」なかで「くうかいそとばになげふでの所」が描かれている。</p> <p>(三ウ上)</p>	<p>「以呂波物語」の特質について</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------	-----------------------

④ 守敏は西寺を空海は東寺をそれぞれの法力により賜わる。

空海はみさき前と再会し、あこや御前を探し続ける。空海の法威を嫉んで守敏は、ほうくわ山で空海を調伏する。

(あこや御前狂乱の道行)

あこやは偶然出会った守敏に空海の行方を尋ねる。守敏は空海を憎んでおり、空海が母を疎ましく思っているといつわる。それを聞いたあこやは怒り、虚空に舞いあがる。

帝の病氣平癒のために清涼殿で東西に壇を構えて互いに法力を争う。

空海は守敏の法力の矢をはらいのける。

守敏の投げた珠数、小蛇となり空海を襲うが、空海の独鈷が剣となり小蛇を打ち払う。

空海は病氣平癒を祈り、守敏は調伏の法を行ったので、金剛力子現われ、守敏をつかみ、虚空に舞いあがる。

空海は高野山に伽藍建立を許される。

空海、母の死骸にすがり愁嘆。母を蘇生させるために虚空藏菩薩を松の枝にかけて祈る。やがて母は息を吹きかえし、空海は母を伴って寺に帰る。

④ 空海を大内に呼びよせようと公卿たちの評議する中で、守敏は空海の評判を嫉んで様々謗言するが、空海参内の論言が下る。

藤の中納言ふゆつぐは御水洗の水を湯に沸せてみせよと迫る。守敏は失敗し、空海が成功する。そして空海は小僧都の官を与えられる。

雨乞いのために紫宸殿の東西に壇を構えて、互いに法力を尽すが、守敏にはその靈験は現われず、空海はみごとに雨を降らせる。

守敏は立腹し、空海調伏のため降三世明王の法を行い、呪咀する。空海も大威徳の法で対抗し、互いに責め合う。

守敏の上以降三世明王現われ、「大ひの弓にちへのやをはけはなし」はするが空海にはあたらない。空海の上に現われた大威徳明王のはなす神通のかぶら矢が守敏の首を射切る。

⑤ 高野山を日本九ほんの浄土と称すことを述べ、高野山金剛峯寺などのさまが語られる。

⑤ 東寺で結縁灌頂が行なわれる。
空海の法力で定をき、さつき前夫婦に一子誕生す
る。

空海の功力によって直氏姿を現わし、空海を衆生
済度のため出生した菩薩と知らず追い出した罪で
苦患にあつたが、臨終正念により往生できること
を告げていく。

あこや御前は守敏に騙され蛇身となって空海の親
不孝を責め激しい怒りを示す。それも真言の功力
によって苦患をのがれ、即身成仏する。

以上の表を参考にしながら前稿でも触れたことではあるが、右の
三作品相互の関連について要点をまとめておく。

ア、三作品とも空海と母あこや御前の物語として構成されており、
説経『かるかや』の「高野の巻」の系統に属している。

イ、『弘法大師出世之巻』と『弘法大師誕生記』の間には、直接
の影響関係が想定できるかもしれない。

a、山部親王の春宮即位に際してのあこや御前立后の評議

b、空海と祖父との数奇なる再会と死別

ウ、『弘法大師誕生記』と『日本九ほんのじやうど』の間には明

【以呂波物語】の特質について

三鈴松の由来が語られる。あこや御前が高野山に
登ろうとすると雷電がとどろく。空海は母にこの
山が女人禁制であると語るが、あこやは承知しない。
そこで空海は袈裟を七つに折り、この上を越えて
何事もなければ登つてよいという。またぐと久し
く止まっていた月経が袈裟に落ち、火焔となって
燃え上り、火の雨を降らせた。そこで、空海は母
を岩のはざまに隠して印を結んで観念すると鎮ま
った（かくし囹）。女の身として高野山に登れ
ないことを嘆き悲しみ岩にとりついて涙を流した
（ねぢいわ）。空海は母があまりに嘆くので、山の
腰まで登らせて住ませた（女人堂）。
挿絵「たつむねは山野に迷い、高野山に至るが、
「てんぐたつむねを引さく」「たつむねやい」

らかに直接の影響関係が指摘できる。

a、月待の夜のあこや御前と神童との出会い

b、高僧が大鷲（大鷹）にさらわれた空海を救う

エ、『弘法大師出世之巻』と『日本九ほんのじやうど』の間にも
影響関係が指摘できるかもしれない。

a、懐胎十月の由来の節事

以上の諸点にわたって前稿でできるかぎり詳しく論じたのだが、
最後の懐胎十月の由来の節事について若干付加しておきたい。⑥

この趣向は当時かなり人気であった節事らしくその趣向が共通し

ているということが必ずしも両作品の特別の関係を示す証左とはならぬ。りえないのではないかと思われること、また、その本文が完全に一致するわけではないので、それを根拠に両作品の影響関係を云々するのは危険とも思われるが、十月の守護仏の順番は完全に一致しており、月待の夜の奇瑞という同一の状況設定がなされている点など、同じ弘法大師物の古浄瑠璃ということからいえば、まったく無関係とするほうが不自然ではないかと思う。因みに懐胎十月の由来の節事を襲用している『甲子祭』、『蟬丸』の守護仏をあわせて掲出しておく。

	『出世之巻』	『九ほんのじやうど』	『甲子祭』	『蟬丸』
一月	不動明王	ふどう明王	不動明王	ふどうみやうわう
二月	しゃかむに如来	しゃかによらひ	薬師如来	やくしによらい
三月	文珠菩薩	もんじゆ菩薩	文珠菩薩	もんじゆぼさつ
四月	ふけんさつた	ふげん菩薩	普現菩薩	ふげん菩薩
五月	ちさう菩薩	ちさう菩薩	地藏菩薩	ぢさうぼさつ
六月	みろく菩薩	()菩薩	観世音	くわんぜをん
七月	やくし如来	やくし如来	彌勒菩薩	みろくぼさつ
八月	観音さつた	くはんぜをん	あしく菩薩	あしくぼさつ
九月	せいし	せいし菩薩	勢至菩薩	せいしぼさつ
十月	あみだ如来	あみだ仏	愛染明王	あいせんみやうわう

話を本論に戻すが、以上の点から、これら三作品が相互に影響関係を持っている可能性は充分考えられるものと思われる。また、三

作品は明らかに説経「かるかや」の「高野の巻」の構想によりながら、空海とその母を囲む一家の悲劇的な離散、再会などを中心に様々の展開をはかっている。『弘法大師出世之巻』は空海の誕生から修行時代、帰朝後の守敏との法力争いから東寺での結縁灌頂にいたるまでの、在唐説話を除く空海一代記として全体が構想されている。それに対して、『弘法大師誕生記』は、佐伯一族の離散、反目などに中心をおきながら、空海をめぐる人々の苦悩を描きだしており、誕生から修行時代にかけての、いわば空海一代記の前半生を対象としている。『日本九ほんのじやうど』も空海の誕生から修行時代を扱っているが、さらに在唐説話、女人高野の説話など「高野の巻」の諸場面を取込んでおり、空海と母あこやの物語で一貫した一代記的構想を持っている。このようにこれら三作品が弘法大師物の古浄瑠璃として一つの流れを形成していることはほぼ間違いないといえよう。

二一

これらの作品を太夫との関連で整理しておきたい。

『弘法大師出世之巻』は井上市郎太夫の正本、『弘法大師誕生記』は山本角太夫の相模掾時代の正本であり、『日本九ほんのじやうど』は伊藤出羽掾の正本と推定されている。

井上市郎太夫については拙稿^③においても触れたように、井上播磨掾の高弟であるが、彼の語りものについて『今昔操年代記』『家乗』などの記事を手掛かりに吟味すると、説経系統のものが含まれており、市郎太夫が『弘法大師出世之巻』を語っているのは自然であること、また、これに先行する同内容の説経系統の正本があっても不思議ではないこと等を指摘した。

角太夫は出羽掾の弟子ではあるが、京都の浄瑠璃劇界にあつて加賀掾と勢力を二分する実力を持つ太夫であり、大坂の出羽座とならんで、延宝、天和、貞享年間にわたり、独特の抒情的な語り口をもつて一世を風靡した。阪口弘之氏は、天和三年の『道行揃』が当時の出羽一門の合同道行集としての性格を備えていることを指摘され、当時の出羽一門について、出羽座にあつて岡本文弥は延宝末から天和にかけてすでに実質的な一座の統率者の地位にあり、出羽の分家筋にあたる角太夫に対しても指導的立場にあり、今は引退してはいるが、一門の総帥である出羽掾とともにこの三者がそれぞれに個性を發揮して大阪、京都の浄瑠璃劇界で大いに活躍していた状況を実証している^④。出羽掾は延宝七年頃には現役を退いていたようであり、信多純一氏は出羽掾と角太夫の関係について、早くは角太夫が出羽掾の影響を受けていたが、延宝末頃からは両者いずれが先行するかわからなくなり、元禄になると角太夫の影響がみえはじめる」と指摘

しておられる。「日本九ほんのじやうど」が『弘法大師誕生記』の影響を受けているのも、こうした浄瑠璃劇界の動向を反映してのものであろう。

ここで、やや横道にそれるのだが、『日本九ほんのじやうど』の性格について触れておきたい。「日本九ほんのじやうど」は月待の場面、大鷹にさらわれた空海を救う件など、『弘法大師誕生記』の影響を受けており、そのみか、懐胎十月の由来の節事は『弘法大師出世の巻』に影響を受けている可能性も指摘できる。さらに、後半は『弘法大師出世之巻』『弘法大師誕生記』などで襲用されなかつた説経『かるかや』の「高野の巻」における在唐説話の龍字問答、筆くらべの場面や、女人高野の隠し岩、ねじ岩の説話を収め、さらには、空海、守敏の法力争いの場面は『以呂波物語』とも無関係ではなさそうであり、『日本九ほんのじやうど』は空海一二代として構想されていたというよりも、いわば、弘法大師物の先行作品を落穂拾ひ的に集めた本といえるのではないか。こうした『日本九ほんのじやうど』の性格はやはり、当時の出羽一門の衰微しつつある趨勢を端的に現わしているのであろう。ただし、『日本九ほんのじやうど』は夥しい落丁のある正本であり、残されている本文と挿絵から全体を再構成して比較しなければならぬのだが、基本的な構造についてはほぼ推定できるので、拙稿^⑤においておおよその筋立

てをまとめておいたので、併せてご参照いただければ幸いである。

『弘法大師誕生記』や『日本九ほんのじやうど』が影響を受けた可能性のある『弘法大師出世之巻』についても、市郎太夫の語りものではあるが、説経「かるかや」の「高野の巻」系統の先行正本の存在を想定しなければならぬかもしれない。『弘法大師出世之巻』にしても出羽一門の語る内容として最も相応しいものの一つといえよう。『弘法大師誕生記』や『日本九ほんのじやうど』が『弘法大師出世之巻』に注目するのはごく自然なことといえよう。弘法大師物の古浄瑠璃の流れには当時の大坂と京都の浄瑠璃劇界における出羽一門の動向が微妙に反映されたものとしてうけとめることができるのではないか。

三

こうした出羽一門の弘法大師物の古浄瑠璃の流れを背景においてみると、加賀掾正本である『以呂波物語』の特異な在り方が浮び上ってくる。まず、『以呂波物語』の梗概を記す。

(第一) 恋敵の兄熊丸の弁もあり、光照はいろはの前に慕われつつも遣唐使として派遣される。空海は高砂の浦で遣唐船に同乗することを懇願するが断られる。(へ) そこで、空海は一点を抜いて、金色の龍の字を波間に書付ける。光照からそのことを指摘され、一点を打つと文字は龍となって天空に舞いあがる。その奇瑞で空海は同乗を許される。

(へ) その後、空海は文珠の浄土に至り、独鈷三鈷を授与される。文珠から譲られた神変自在の獅子に乗って渡天し、三蔵と出会い、空海は阿字の奇瑞を見せて大般若経を手えられ、獅子にのって帰朝する(大師帰朝の道行)。

(第二) いろはの前は川遊びの折に光照と再会し、口説、濡れ。いろはの前は、物陰から現れて尤もしく弟を戒める熊丸に彼の送ってきた数百通の恋文を投付け恥しめて退散させる。その後、熊丸は母に光照の勘当を迫り、受入れられないとみるや母を殺害してしまふ。そこに来合せたいろはの前は、光照が母を殺害したものと早合点し、自ら狂気をよそおって光照の罪を引受けようとする。

(第三) 空海を憎む守敏は、逃込んできた熊丸を匿う。そして、熊丸を追ってきた光照を返討ちしようとする。(こ) そこに来合せた空海が法力で守敏らを退散させ、光照をともなつて高野へ上る。いろはの前は河村金吾館に捕えられている。姫はいろはの歌の巻物を金吾夫婦に送り、最後の寺参りを許される。その間に金吾の妻が姫の身代りに立つ。ところが、戻ってきた姫が、引きたてられていく金吾の妻の姿を見付けて、名乗りでてしまふ。互いにいろはの前と言張り、譲らないので、捕縛に来た守貞は二人とも討取ろうとするところ、金吾の機転で逆に守貞を討取って脱出する。

(第四) いろはの前、高野に赴く(いろはの前道行)。いろはの前は神谷の里まで来たところで、衰弱し重体となる。金吾は通りがかりの山人に高野山に尋人がいることを告げて捜す手立ては無いものかと相談するが、高野が女人禁制の厳しい道場であること、また、数多くの僧侶が修行しており、名前も分らずに捜すことはできないと教えられる。金吾の妻は、そこに偶然来合せた二十あまりの若僧に事情を話し、光照の行方を知る術はないかと尋ねると、やがて、若僧は落涙し、意を決して今のは際の

いろはの前に奥の院の加持土砂を含ませる。その効により、いろはの前はすぐに意識を取戻す。そして、わが夫と若僧に抱きつくが、光照はそれを振切つて女人禁制の山に帰っていく。絶望したいろはの前は氣力を失い、谷底に投身する。その時、光照を伴つて山を下つてきた空海は姫を助けようと自ら谷底に飛込む。(d) 奇瑞が現れ、空海は蓮の葉に掬いとられ、姫もその茎につかまって危うい所を救われる。そのまま、空海は姫を連れて都に上るが、それを見て守敏は蓮の葉につかまる姫を印を結んで墜落させる。ところが、空海が祈念すると五色の糸が蓮の葉から繰りだされ、姫を包みこんで救う。

(第五 (e)) その頃、早魃が続く、空海と守敏は勅諭により、羅生門の東西に壇を構えて雨乞の行を行う。ところが守敏は折棒の折に空海を調伏呪しようとする。空海もそれと氣付いて護身の法を結んで互いに激しく責合う。関白は双方を止め私の祈りをやめよと戒める。守敏は光照夫婦を匿う空海を、空海は熊丸を匿う守敏をそれぞれに非難しあう。関白は二人を制して、いろはの前を当初の通り、罪科に処し、金吾夫婦は囚人を助けた科、光照は兄に対する不孝の科で同罪とされる。そして、三人が流罪にされるところ、(f) 空海の行力が天に通じ守敏は業火に焼かれて死に、熊丸は護法夜叉神に引裂かれて大團圓を迎える。

右の梗概からも明らかのように『以呂波物語』では、空海を囲む一家の悲劇的な離散、再会等を中心とする前述した弘法大師物の古浄瑠璃とは異なり、むしろ、空海をめぐる立役方の諸人物の流浪や苦衷を熊丸、光照の間に展開されるお家騒動の枠組みの中に組込み、そこにいろはの前との恋をからませて全体を構想している。そこで空海は立役方の光照に味方して敵役方の熊丸に組みする守敏と対

決するといったかたちで活躍するに止どまっている。そのために空海の登場する場面は光照やいろはの前を救出する場面や自らの靈験奇瑞をあらわす場面が多く、その舞台はほとんど大仕掛けなからくり演出の見せ場に限定される傾向が見うけられる。梗概の傍線箇所 a ~ h は空海の登場する場面だが、それぞれにからくり仕立ての演出をとまなっている。

a は元来、空海の在唐説話であり、龍字問答として説経「かるかや」の「高野の巻」、「弘法大師御本地」を始め多くの空海説話に見られるものだが、それを入唐のための船出赦免の奇瑞として改め、冒頭の華々しい場面に相応しく設定しなおしている。この場面は、絵入本^⑧によれば「舟印に龍といふ字かき給へはにはかに大じやあらはれ出るからくり」とあり、からくりの大仕掛けな演出がなされたものようである。

b は説経「かるかや」の「高野の巻」等にも見える独鈷三鈷の説話、謡曲『石橋』の翻案による獅子のからくりが仕組まれている(一般に「獅子の乱曲」として知られている)。絵入本によれば、「もんじゆのじやうとよりくうかいはし、にのり都へきてうの所大からくりにてじゆうじざいにはたらくところ也」とあり、この場面はたいそう人気を博したところと思われる。空海の獅子に乗っての道行は加賀掾正本『和氣清麿』三段目の「馬道行」・「乱曲揃」「さ

いこく名所馬の段道行」等にも同工の場面がある。

c はくりから不動のからくりを用いている。絵入本にも「くりからふとうのからくり」とあり、加賀掾正本「鳥羽恋塚物語」四段目にも同工のからくりが用いられている。

d は大仕掛なからくり演出がとられたものと推定される。絵入本によれば「大からくりにてくうかかれんようにのりひめをつれてかうやさんより都とうじへこくうをひきやうしのほり給ふ」とある。

e は空海と守敏の壇を構えての法力争いであり、中世から近世にかけて最も人気のある代表的な空海説話である。壇を構えての祈祷の場面は加賀掾正本「京わんらべ」などにも見られる。

f は直接からくりを用いてはいないが空海の法力を現わす場面として設定されている。宗教靈験物の最終段にしばしば見られる趣向である。

このように「以呂波物語」では、空海の登場場面はそのほとんどが大仕掛なからくり演出と結びついており、空海の靈験、奇瑞を現わす場面に限られる傾向が強い。そして、そこで描出される空海も入唐から帰朝後、雨乞の法力争いまでとなっており、いわば空海一代記の後半生に絞った筋立てになっている。

四

「以呂波物語」は他の弘法大師物の古浄瑠璃「弘法大師出世之巻」「弘法大師誕生記」「日本九ほんのじやうど」などが空海の母の物語を組みこむことで全体を構想しているのに対して、それは逆に母の物語をまったくその世界に組み入れることなく、弘法大師の世界を作りあげたという意味では独自の位置を占めているといえよう。例えば「第四」の高野山の場面は明らかに説経「かるかや」のかるかや道心とその子石童丸との出会いと別れの場面を翻案したものである。作者らは当然説経「かるかや」を翻案している以上、同書の「高野の巻」にある空海と母の物語を「以呂波物語」のなかに組みこんでいく可能性を持っていたはずであるが、それをあえて意図的に切捨てているといわなければならない。その意味ではやはり、「以呂波物語」は空海の母の物語を含む説経の系統に属す弘法大師物の方向を避けて、新たに光照、熊丸の間に展開されるお家騒動の世界を設定し、いろはの前との恋を搦めた筋立ての中に、空海と守敏の対立を組みこむというかたちで全体を構想したのである。なぜ「以呂波物語」は他の弘法大師物の古浄瑠璃と異なった方法をとったのか。それについてはこの当時の浄瑠璃劇界の動向がかなり、はっきりとしたかたちで現れているのではないかと思われる。そこで、

『以呂波物語』を語った加賀掾と他の弘法大師物の太夫たちについてすこし見直しておきたい。

ここでは『以呂波物語』と相前後して初演されたと推定されている『弘法大師誕生記』を中心に加賀掾と角太夫についてまとめておきたい。『以呂波物語』は東寺の弘法大師八百五十年忌法養を当込んで初演されたものと推定されている。『新補倭年代皇紀畫章』によれば「貞享元年三月廿一日」の箇所「東寺にて弘法大師の八百五十年忌を修す」とあり、これを当込んだものであろう。角太夫の『弘法大師誕生記』もおそらくこの法養を当込んで初演されたのであろうと推定されている。両作品が同じ時に同じ素材に基づいて競争をしたとすれば両者の間にかなり強い対抗意識があったものと考えられる。加賀掾は角太夫とともに当時の京都における浄瑠璃劇界の両雄であり、互いに相手を強く意識あつていたと想像される。延宝から天和にかけての加賀掾と角太夫の角逐と拮抗の様についてはすでに阪口弘之氏によって詳細に論じられており、この両作についても「両者の確執の深さを示す好箇の事例であろう」と述べておられるが、両者の激しいライバル意識が作品内容にも現れているようである。もう一度改めて両作を見直してみることになろう。

『弘法大師誕生記』が空海と母あこや御前の物語という構想を持ち、空海の渡唐に至るまでの半生を扱っているのに対して、『以呂

波物語』は空海と母の物語を意図的に外して、空海についても渡唐以後、帰朝してからの守敏との法力争いに至るまでの時期の弘法大師を描いている。前者は空海の誕生にともなう佐伯一族の離散、反目などに中心をおきながら空海をめぐる人々の苦悩を描きだしている。中でもすぐれているのはあこや御前の危機を救うべく自らの娘を身代りに立て、その首を持って首実検の場で自害を遂げるかげゆの活躍であろう。この身代りの趣向は対面の趣向に独自性を發揮した角太夫の語りものらしさがうかがわれるところである。これに対し『以呂波物語』は前述したように光照と熊丸の間で展開されるお家騒動の枠組みの中で光照というはの前の恋、忠臣河村金吾の活躍を盛込んでいる。『弘法大師誕生記』が母との対面のかなった空海が修行のために屏風浦でいろは歌を伝授されるところで終わるのに対して『以呂波物語』は修行時代の空海から始まり、守敏僧都との法力争いで終わる。いわば、この両者は大師一代記説話を二分するかたちで構成されているといえるだろう。このような『弘法大師誕生記』と『以呂波物語』はその内容から見ると、意識的に重複を避けているように思える。このことはやはり、両作の間に角太夫、加賀掾のかなり強い対抗意識が働いていたことを示しているといえよう。

なお、両者の先後関係については不明であり、どちらが重複を避

けたのかは分らないが、ライバル同志の関係にある加賀掾にしてみれば、弘法大師八百五十年忌を当込んで興行する場合、角太夫が説経系統の「高野の巻」等を踏まえてくることは予想できたはずであり、それとは異なったかたちで『以呂波物語』を制作、上演したのは、むしろ当然であつたといえよう。

『以呂波物語』は直接には角太夫との競作というかたちで上演され、『弘法大師誕生記』とは異なつた弘法大師物となつた。この当時の加賀掾、角太夫の確執がこうした対照的な作品を生み出したといえるのだが、弘法大師物の古浄瑠璃の流れからいえば『以呂波物語』はいささか特異な作品として位置付けられよう。しかしながら、皮肉なことに浄瑠璃史はむしろ、『以呂波物語』の方向へとすすんでいくことになる。加賀掾、角太夫らと新旧交替して浄瑠璃劇界をリードしていくことになる義太夫は『以呂波物語』を語り、また、後の『讃州屏風浦』も、『以呂波物語』を継承していくことになる。最後になるが、『以呂波物語』に関する近松存疑の問題については今回は触れられなかったことをこわつておく。なお、本稿は昭和六十一年度、同志社大学国文学会の大会において発表した原稿に加筆したものである。

注

①③⑦ 拙稿「近世文芸」四十三号
 ② 注①拙稿において「十月の守護仏の順序にも多少の異同が見られる」と指摘しているが、実際には、対照表に示したように、全く同一である。本紙上を借りて訂正させていただきます。

④ 「出羽座をめぐる太夫たち―「道行揃」を手がかりに―」（『人文研究』二十六巻第三分冊）

⑤ 古典文庫『古浄瑠璃集』角太夫正本一、解題。

⑥ 「資料紹介、絵入浄瑠璃本『日本九ほんのじやうど』」（『語文研究』二十二）

⑧ 東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵『以呂波物語』
 注⑤に同じ

⑩ 「加賀掾と土佐像―「他力本願記」と「六角堂求世菩薩」をめぐる―」（『人文研究』三十巻三分冊）